八王子便り（6）

「花の命は短くて、苦しきことのみ多かりき」とは、作家・林芙美子の言葉として伝わっています。二年ほど前、『物語としての旧約聖書・上』（NHK 出版、2018 年）にこの言葉を引用しようとしましたら、「苦しきことのみ多かりき」は「苦しきことのみ多かれど」が正確で、「風も吹くなり、雲も光るなり」と続くのである、と編集者に教えられました。

「人生は短く，芸術は長い」（vita brevis, ars longa）という格言をもって，人生の短さについて論じたのは、ローマの哲人セネカでした（セネカ『生の短さについて』岩波文庫）．彼によれば，生涯が短く感じられるのは，過去を忘れ，世事に忙殺され、今という時をなおざりにし，未来を恐れるからだといいます。それに対して、先人のすぐれた思想に学びつつ，今を大切にし，将来に希望をいだくとき、人は「死すべき人間の生を永遠不滅の生へと転じ」うるのである、と述べています．

人生がはかないとは、古今東西を問わず、人類に共通する感覚なのでしょうか。すでに旧約聖書の詩人たちが人の一生を短い花の命にたとえています（詩 90：6、102：12、ヨブ 14：2 ほか）。日本では、古来、そうした感覚を和歌に詠みました（「花の色は移りにけりな……」）。人生のはかなさを桜の花に託して「詠嘆した」のです（唐木順三『無常』）。旧約聖書の信仰者たちは、しかし、そうした感覚を情感のなかだけにとどめることはしませんでした。はかない人生がはかないままで神とふれあう。人はだれしも「永遠の相のもと」（スピノザ）に生かされている。そう感じ取りました。自然の背後に見えない神のはたらきを洞察したからです。

先便でお伝えしたドクダミの花も、「花の命」の例に洩れず、おおかたしおれてしまいました。そんななか、舗装された道の端に咲き続けているごく小さな花があります。その名はアカバナユウゲショウ。数年前に、この小さな草花が気になって、調べてみましたら、「ユウゲショウ」という素敵な（?）名前がつけられていることを知りました。一昔前、太平洋を渡ってきた草花だそうです。どんなところでも、小さな種から芽吹くらしく、散歩中、目を凝らしますと、住宅団地のここかしこに増え続けています。ご存じなかった方は、近くの道端に咲いていないか、探してみてください。

6 月になり、自粛解除となったために、私は週に一度は都心に出向いています。駅までは、車道と林の間の歩道を 20 分ほど歩きます。その歩道の脇に、いま、花を咲かせているのはホタルブクロとアザミです。ホタルブクロには、白と薄紫の二種類の花があります。昔の人は、夜半に飛び交ったホタルを昼間はこの花のなかで眠らせてあげよう、と思って、こう名づけたのでしょうか。

アザミは目にしますと、ほぼ自動的に「あざみの歌」を思い浮かべます。この歌は子供のころ、ラジオから流されていたはずですけれど、憶えたのは、大学院生としてはじめて発掘調査に参加した 1974 年の夏のイスラエルでした。調査団長であられた大畠清先生（1983 年に逝去）はドイツ・リートを朗々と詠われる大柄な方でしたが、歌謡曲では「あざみの歌」がお好きだ、とおっしゃり、先輩にあたる団員の先生方がよく口ずさんでいたのです。「秘めたる夢を一筋に」などといった表現に惹かれた青年時代のこ

とでした。

「あざみ」は、創世記 3：18、ホセア書 10：8 をはじめ、しばしば「茨」と対になって聖書に言及されます。検索してみますと、口語訳聖書には 7 回、新共同訳聖書には 10 回、協会共同訳聖書には 13 回と、なぜか、邦訳聖書に「あざみ」が少しずつ増え続けています。「あざみの歌」が影響を及ぼしたとは思えませんが、……。

そこで原典に遡ってみますと、協会共同訳が「あざみ」と訳すヘブライ語の単語は 6 種類にわたります。訳の可否は別としても、かの地では、たしかに、アザミの種類が多いのです。花の色だけでも、白も黄色もあって、紫に限りません。背丈が 2 m 以上になるものまであります。パレスチナの村の女性たちが、春先、アザミの茎を切り取って、皮をむいて食べながら、畑の周りを散歩している光景を目にしたこともありました。

新約聖書に「あざみ」がでる箇所は、マタイ福音書 7:16 とヘブライ書 6:8 の 2 箇所です。どちらも「茨」と対になっています。もっとも、イエスが語った「野の花」（マタイ 6：28）は、古くは「野の百合」と訳されもしましたが、最近では、マリア・アザミ（学名 silybum marianum）であったろう、といわれます（荒井献『問いかけるイエス』NHK 出版、110-111 頁）。葉脈の部分が白くなりますので、別名はミルク・アザミ（英 milk thistle）。マリアの乳がこぼれ落ちたからだ、との言い伝えがあるそうです。このアザミも食用になり、実からとれる成分（silymarin）は肝臓を守る効能があるので、サプリメントとして売られているとのこと。

地中海地域ではアカンサス（英 acanthus）と呼ばれる葉アザミがひろく知られています。最近では庭に植えているお宅もみかけます。ギリシアでは「コリント式柱頭」の装飾模様として用いられました（右写真）。葉はアザミの形状をしていますが、花は茎の先端に丸く咲くのではなく、茎の周りに下から上まで筒状の花弁をたくさんつけますので、花だけみると、アザミとは思えません。

アカンサスはギリシア語のアカントス（ákanthos）に由来します。akanth-は「棘」を意味し（「火の棘」という意味のピラカンサなどにも残ります）、「茨」を指すアカンタ（ákantha）とまぎらわしいのですけれど、アカントスのほうは旧約聖書のギリシア語訳にも新約聖書にもでてきません。マタイ福音書 7：16 とヘブライ書 6：8 では、「茨」にアカンタが、「あざみ」にはトリボロス（tríbolos）が用いられています。そういえば、イスラエルで野生のアカンサスを見かけたことはありませんでした。

この時期、目にすると、なぜかうれしくなる小さな花がもう一つあります。ネジバナです。ねじり花、ねじれ花とも呼ばれるそうです。毎年、自宅の前の公園の斜面と駅までの歩道の脇の草むらで再会するのですが、先週はじめ、市に委託された業者による公園の草刈りが実施されましたので、今年は、公園の斜面でお目にかかることはなさそうです。そこで、先週、駅から自宅に戻るとき、歩道の脇の草むらに目を凝らしましたところ、三茎ほどが花をつけておりました。

一本の茎に沿って、らせん状に花を咲かせるネジバナは、蘭の仲間です。らせんの巻き方は右巻きもあれば、左巻きもあります。白いネジバナもあるそうですが、まだ、お目にかかってはおりません。

草木が美しい花を咲かせるのは、交配によって実をつくり、次の世代にいのちをつなぐためですね。ところが、ドクダミのように、ホタルブクロや前に紹介した「十二単衣」のように、花を咲かせて実をつけなくとも、次世代を増やすことのできる草花が少なくありません。花は不要ではないかと思います。それでも、花を咲かせて、見る者を喜ばせてくれます。人の心を和ませ、優しい気持ちにしてくれます。私は、こうした花の機能を植物学者がどのように説明するのか知りませんので、そこに、神による創造世界の麗しさを感じないではいられません。

最後にお知らせ三点。

1.「便り（5）」を差し上げてから、少なからぬか方からドクダミに関するお便りを頂戴しました。「十薬（ジュウヤク）」という別名も説明くださり、八重咲のドクダミについてお書きくださった方もおいでです。今年になって、私どもの住む住宅団地にも、八重咲のドクダミが咲く一画があることを知りました。

2. 新型コロナウィルス感染のため、私どもの経堂聖書会は7月まで日曜日の聖書会を中止といたしましたが、福岡聖書研究会では、秀村弦一郎さんの指導のもと、パソコン・ソフト Zoom を用いた日曜聖書集会を続けておられます。月本は6月28日にその聖書集会に参加し、「エレミヤのまなざし」と題する聖書講話をさせていただくことになりました。すでにお知らせした方も少なくありませんが、あらためて、秀村さんからいただいた案内を添付いたします。

3. 経堂聖書会は、続く8月は夏休みとし、9月13日に再開を予定していますが、知久雅之さんにお願いしている会場の予約はこれからです。7月半ばにホームページで詳細をご連絡させていただけるものと思います。

4. この間、自宅では、ヨブ記25~27章を学ぶかたわら、バビロニアの創造神話『エヌマ・エリシュ』の翻訳を仕上げました。

（2020.6.23 沖縄「慰霊の日」に，月本昭男記）
（今回掲げた写真はすべてインターネットからのコピーです）